



パリ通信第108号

今月号のベストピアのカバー写真は、古賀さんの撮影による「2020年クリスマスを迎えるノートルダム大聖堂工事現場」です。

本文は、先月号に続きパリの現状とルイズ・カトリーヌ号(アジュール・フロタン)です、日本の一企業と古賀さんの通訳奉仕で一步一步進められています。3D技術の活躍もあります。

(108) COVID 19 フランス文化財修復

10月30日から再びロックダウンが実施されたフランス。12月15日から昼間の外出は証明書なしで許可され、22時から翌日6時までの夜間外出禁止に切り替わる。1日1時間1kmの自由時間も1日3時間20km以内に緩和され、15日から昼間はフランス国内を自由に移動できる。クリスマスを家族で過ごす文化行事だけは犠牲にしたくないフランス国民の願いがある。

ヨーロッパのコロナ感染拡大第2波が猛威を奮う中、フランスの事情も決して好ましくはない。10ヶ月を超えるコロナ禍に疲れ、半ば諦めた感がある。ワクチンは大きな希望だが年内の接種は難しく、来春までに第3波も懸念されている。

厳しい制限と困難な個人生活を強いられる年ではあるが、文化財の修復工事が静かに続いているのは嬉しいことだ。火災で大きな被害を受けたパリ・ノートルダム大聖堂、セーヌ川増水で沈没したルイズ・カトリーヌ号(アジュール・フロタン)ともに家から歩ける距離にあり、毎日飽きることなく修復工事を観察している。

文化財指定を受けた船の修復に関わることになり、文化省を頂点に文化財修復のピラミッド構造を発見しつつある。文化財修復を担当できる建築家も明確に分類されている。

1) architecte (建築家)

6年の高等教育終了後与えられる資格。文化財に指定されない建物の修復ができる。

2) architecte du patrimoine (文化財建築家)

6年の高等教育終了後、2年間の専門課程が必要。ユジェーヌ・ヴィオレ・ル・デュック(1814-1879)の精神を具現化し、1887年創立された「École de Chaillot」(シャイヨ宮内建築学校)にて2年の専門課程を経て「DSA」(Diplôme de Spécialisation et Approfondissement)の称号が与えられる。その後、「AUE」(Architecte et Urbanistes de l'Etat)(国家建築家、都市計画建築家)の資格を取得することもできる。民間及び地方団体などが所有する文化財を修理・修復・復元ができ、文化財以外の建築事業もできる。

3) architecte de Bâtiments de France (フランス建造物建築家)

6年の高等教育終了後、2年間の専門課程が必要。国家公務員として公共サービスに携わる。民間、政府を問わず、建築プロジェクト(特に文化財プロジェクト)に直接介入することではなく、2)文化財建築家を監督する。

4) architecte en chef du monument historique (歴史的建造物チーフ建築家)

6年の高等教育終了後、2年間の専門課程が必要。2017年の数字でフランス全国39名のみ。国が所有する重要文化財の修理・修復・改築などを行う資格。パリ・ノートルダム大聖堂を始めとするフランス国内の大聖堂修復、ヴェルサイユ宮殿修復、エリゼ宮など国家所有の宮殿修復を行う。ノートルダム大聖堂は4)、LC号は2) が修復工事を指揮する。一般の建築ライセンスでは法的に文化財修復・復元の資格がない。

そして文化財建築家を支えるのが文化財専門の測量士、構造エンジニア、コンクリート分析ラボなど最近の科学導入である。ルイズ・カトリーヌ号の3Dデジタル測量を行なったArt Graphic & Patrimoine社のシ rilル・ベス・ド・ベルク氏は2019年4月15日ノートルダム大聖堂が火災に遭う前の「フォレ」(森の意。ノートルダム大聖堂の木造屋根組み)を3Dデジタル測量を行なっている。最新のテクノロジーは文化財を救う役に立っているが、長い歴史を生きた空間に科学だけでは表現できない不思議な魅力を感じるのはシ rilルさんだけではないだろう。フランスの文化財修復は一大産業で、持ち主の意に沿わないこともあるが、これから2-3年が予想される修復工事でどのような人たちに会えるか楽しみである。



ルイズ・カトリーヌ号の3Dデジタル測量を行なったArt Graphic & Patrimoine社のシ rilル・ベス・ド・ベルク氏